

・今回取り上げた下記の5冊は、ともに「中国が世界第2位の経済大国である」ということを前提にして書かれている。私は「中国経済は砂上の楼閣」であると考えているので、これらについては同意しかねるが、今回はその点への論及は行わない。

1. 「中国市場攻略のルール」

「2010年には、GDPが日本を抜いて米国に次ぐ世界第2位。保有する外貨の量が世界最高の2兆8500億ドル(236兆円)」

2. 「やっかいな中国人を黙らせる法」

「中国は、世界の工場と揶揄されながらその立場に甘んじた結果、気が付けば世界第一の外貨保有国になっていた」

3. 「いまさら聞けない中国の謎66」

「世界第2位の経済大国になった隣国・中国の一挙手一投足は、直接・間接を問わず日本にいろいろな波紋を巻き起こしている」

4. 「中国社会の見えない掟・潜規則とは何か」

「国内総生産(GDP)が日本を超えアメリカに次ぐ世界第2位になった中国には、大国にふさわしいルール順守の責任がますます重くなる」

5. 「中国人の腹のうち」

「2010年、中国のGDPは日本を追い抜いた。中国のGDPは今後10年以内にアメリカを追い抜き、世界第一の経済大国になる」

1. 「中国市場攻略のルール」 陳立浩著 すばる舎 8月28日

帯の言葉：「巨万の富が眠る13億人マーケット。狙うなら今だ」

陳立浩氏は第1章で、「夢の中国13億人市場で成功する！ とっておきのビジネス情報」という見出しを付け、いろいろなことを書いているが、それらはすでに巷でよく知られている情報ばかりで、「とっておき」のものはなにもない。ことに儲かっているビジネスの代表例として大企業の資生堂を紹介しているだけで、中小零細企業の成功例はまったく書かれていない。これで中国市場を云々するのは、いささかおこがましい。でも、この本だけでなく、他の多くの識者も中国市場に進出し成功したという日本企業を紹介する場合、大方、投下資本とその回収期間、利益とその配当額、そして日本での本社の当該事業納税額などを明示していない。多くの「大儲け企業」話は、外見上の派手さや企業の広報を情報源にしており、その企業が本当に大儲けしているかどうかはよく吟味されまま紹介されているのが実情である。

陳氏には、次回作で多くの「大儲け企業」、とくに中小零細進出企業の実情を財務諸表付きで報告してもらいたいと思う。ことにもっとも大事なことは、それらの「大儲け企業」が、日本国家にどれだけの税金を払っているかを調査し明示することである。余計なことだが、日本国家の庇護のもとにありながら、自企業だけ大儲けし、海外に儲けを蓄積しているのでは虫が良すぎると思うからでもある。日本国家への納税という点を進出企業の評価の基準にし、多額納税中国進出企業の例を少なくとも100社は集め、それらを分析すれば、もっとも有効な「中国市場攻略のルール」が浮かび上がってくるであろう。それをしないで、実際には中国市場で大儲けできず、日本国家に税金を納めている企業が少ないにもかかわらず、「狙うなら今だ」と進出を煽るのは大きな間違いである。

陳氏は「中国ビジネスの販路開拓には、“展示会”と“ミッション”に注目！」と書いているが、私の経験から言えば、この方法はあまり効率的ではない。展示会などでは、中国人の名刺が山のように集まるが、実際にビジネスに結びつくのは1/1000ほどの確率である。玉石混淆の名刺の山の中から、掘り出し物を見つけるには大変な労力を要する。

陳氏は第5章の第4節で、「違法の労働者スライキ、なぜ起きる？ 効果的な対策は？」と見出しを付け、一文を披露しているが、その中には「人手不足や新労働契約法」の文言がまったく出てこない。これでは、陳氏は中国の現状をまったく理解していないと言わざるを得ないし、その陳氏が書いた「中国市場攻略のルール」を読んでも、中国市場が攻略できるとはとても思えない。

2. 「やっかいな中国人を黙らせる法」 鈴木健介著 草思社 9月25日

副題：「中国要人が教える中国式マネジメント術」

帯の言葉：「中国人は3つに分類してビジネスしよう！ 中国人にドラッカー式マネジメントは通用しない！」

巻末の鈴木健介氏の略歴には、「1994年10月新華通社「瞭望周刊」と広告代理店契約を結ぶ。以後中国でのビジネスを本格化するも、2001年倒産・破産」と記してある。その失敗体験が影響しているのか、本文中には中国人への否定的評価が多く、タイトルも「やっかいな中国人をだまらせる法」という中国人を見下げたようなものになっている。鈴木氏が中国とのビジネスを展開し始めた1994年は、「中国ビジネスの黄金期」を過ぎた時点で、朱鎔基の経済引き締め政策が始まったところである。したがって鈴木氏のビジネスの失敗は、戦略的なものに大きく左右されたのではないかと推察される。しかし鈴木氏は失敗を戦術的なものとして理解し、「やっかいな中国人の上手な取り扱い方」を、この本で

披露している。

鈴木氏は第1章で中国人を、「虫・犬・牛」の3タイプに区別して、その見方と対処法を書いている。中味を読むまでもなく、このような表現だけで、鈴木氏の中国人観を見て取ることができる。このような表現は中国人を侮蔑することにもなるので、できれば避けて欲しかった。本文中には、ときおり真面目な記述があり、それなりに学ぶべきところもあるので、残念である。

鈴木氏は、「日本人は教えてくれた、また育ててくれた恩を意識して共存共栄を図るが、中国人は身につけた能力は自分が努力した結果であり、誰の援助も受けていないと考える人が多い。隣人である中国人と仲良くするためには、人材育成に期待しないことだ。期待しなければ裏切られることもないし、失望することもない」と書き、「中国人を育てようとする考えをなくせ」と力説している。私にはこのような鈴木氏の主張が理解できないわけではないが、これでは中国ビジネスは成功しないと思う。私は鈴木氏とは違い、これまで多くの中国人を一流の経営者に育て上げることに成功してきた。その私の体験から、日本人には「相手の中国人に、最初から独立を前提として教え、育てる」ことを勧める。つまり中国人を膝下に囲い込もうとするのではなく、中国人を自由に泳がせ、そこから利益を得る方法を構築すべきなのである。

なお鈴木氏は、中国人が宴会などの乾杯のときに、テーブルを指でトントンと叩く習慣について、あれは乾隆帝の仕種を真似たものだと書いている。おもしろい指摘である。

3. 「いまさら聞けない中国の謎66」 歐陽宇亮著 プレジデント社 9月25日

副題：「中国人の発想・決断・行動を知らずしてビジネスの成功はない」

帯の言葉：「なぜ日本で炊飯器をたくさん買うのか？ なぜ非があっても謝らないのか？」

この本は、中国の実情をソツなくまとめ、書き連ねている。内容に大きな誤りはない。しかし深い掘り下げもないので面白みには欠ける。いわば毒にも薬にもならないという本であるが、中国ビジネス初心者には手頃な本でもある。

ただし「なぜ(中国人は)大枚の現金を持ち歩くのか？」と題した一文で、「大きな買い物でもクレジットカードなどはあまり使わず、必要な分のお金を持ち歩く。皆、現金を抱えていくことになる」と書いているが、これだけは明らかな誤りである。現在、中国では、スーパーなどの少額の買い物などまで、キャッシュカードで払う人が多くなり、そのためにただでさえ混み合うカウンターに長蛇の列ができてしまうほどになっている。乗り物などもプリペイドカードなどが普及しており、現金を持ち歩く人は少なくなっている。また例として、歐陽氏は「ウイグル族の女性は、買い物のときはスカートをめくり、靴下に挟んだお金で支払いをする。いわば靴下がサイフ代わりだ」と面白いことを書いている。私はウルムチ、カシュガル、ヤルカンドなど新疆ウイグル地方になんども出かけているが、ついぞこのような光景を目にしたことがない。

本文中には、前後で相矛盾した記述もある。たとえば「中国沿岸部の都市にいる出稼ぎ労働者は、社会保障制度が整わないなかで過酷な労働を強いられている場合が多い。何かの理由で仕事を失うと、どこまでも貧困になってしまう環境にある」(P. 46)と、「これまで安価で豊富な労働力で“世界の工場”と呼ばれてきた中国だが、農村の余剰労働力が底をつき、人手不足となる“ルイスの転換点”を迎えたとも言われる」(P. 166)とは、明らかに矛盾している。

なお本書は、「中国は日本の良さを見て、稚拙ながらも学ぼうとするが、日本は中国の悪さを見て、嫌悪感を抱いたり、人によっては見下して優越感を得たりする。これでは決して未来志向とは言えない」と書き、日本人の態度をたしなめている。私にもこの傾向はあるので、自戒しながら進むこととする。

4. 「中国社会の見えるない掟—潜規則とは何か」 加藤隆則著 講談社 9月20日

副題：「暗黙のルールが支配する中国の裏側を覗く！」

帯の言葉：「不当逮捕、違法監禁、冤罪、汚職、言論弾圧、闇取引 法より優先される面子・掟とは何か？」

現在、読売新聞中国総局長である加藤隆則氏の著した本書は、歴史に通暁した加藤氏の博識と、現場に密着した加藤記者の眼力が相俟って、きわめて読み応えのあるものとなっている。しかも加藤氏は国家権力に媚びを売らず、一貫して人民の立場に立っており、ジャーナリストの鏡のような行動を取っている。ただし、あえてその加藤氏の記者魂と行動に注文を付けるならば、今後は、「人民も性善ではなく、性悪である」という前提で取材に当たって欲しいと思う。そのためには加藤氏自身にも、自らを正義の味方ではなく、「性悪な人間」とあるという自覚が必要不可欠である。

本文中には加藤氏の正義感が勝ちすぎて、「性悪な人民」を見逃し、事態を見誤っている個所が散見できる。たとえばチベット暴動やウルムチ暴動についての記述であるが、当日のそれらの暴動は明らかに少数民族側の漢族側に対する暴力行為に端を発している。もし少数民族側が正当なデモのみを行っていたならば、絶対に弾圧はなかった。これらの現場を私は直視しているので、このことを断言できる。加藤氏が読売新聞記者の名誉に賭けて、私に反駁するならば、私はそれを受けて立つ自信がある。この点で少数民族側に立ち、彼らの暴力行為を是認することは、少数民族問題の解決を遅らせるだけである。私は少数民族に対しては、「臥薪嘗胆をせよ。どんなことがあっても暴力行為に訴えてはいけない。経済面を含むあらゆる分野で努力を重ね、漢族を凌駕する力量をつけよ」と、呼びかけることがもっとも大

切なことであると考えている。

加藤氏は「おわりに」で、「本書の執筆に当たっては、社会の周縁にありながら、たくましい精神と高遠な理想を持って国の将来を憂えている人々との交わりが、大きな動機の一つになった」と書いている。残念ながら本書には、中国人の経営者の登場がきわめて少ないし、外資の実態についてはまったく語られていない。つまり加藤氏の脳裏では、知識人や虐げられた人民などへの関心が強く、昇竜の如き中国経済の当事者である資本家や経営者が取材対象としておざなりにされていると思われる。次回作では、「性悪の体現者である中国人経営者」を赤裸々に描いてもらいたいものである。なぜなら「性善な人民」も「性悪な金持ち」を目指して、いっせいにチャイニーズ・ドリームを追いかけており、それが現実の中国経済の隆盛のエネルギー源となっているからである。なお、これは少数民族地域でも例外ではない。

加藤氏は四川省大地震のとき、生徒を置き去りにして自分だけ逃げた教師のことについて、「一人の青年を社会から抹殺するやり口は異常だ。范は身を挺して生徒を助ける勇氣はなかった。表現の仕方に不適切な部分があった。だが、大きな体制の潜規則を相手に、誰もできなかった問題提起を行った勇氣はあった。もし、真実の報道が行われ、道徳の強制が行われなかったならば、さらに、地震の避難訓練が定期的に行われ、学校の建物に手抜き工事がなければ“范跑跑(早逃げの范)”は登場していなかった」と書き、彼を擁護している。これは理解できないことはないが、私は詭弁の類であると考え。やはり責任ある教師が生徒より先に逃げてしまうのは、人間として許されるべきことではない。この早逃げの范と今回の東日本大震災のときの中国人研修生を助け死んで行った日本人経営者を比較すれば、それは一目瞭然である。かたや道徳的規範となるべき教師であり、かたや金儲けが主体で道徳とは無縁の人間である。日ごろ性善を志向している知識人で人民でもある教師が逃げ、性悪で日ごろ金儲けに邁進している経営者が身を挺して人を救ったという実情を、加藤氏は直視し、人間の本性に迫る主張を展開すべきである。

5. 「中国人の腹のうち」 加藤徹著 廣濟堂新書 9月9日

著者の加藤徹氏は、裏表紙で「古典作品から現代風俗にまで通じた気鋭の中国文学研究者」と紹介されている。たしかにこの本には、私が今までに聞いたことのない文学研究者的？な記述がある。たとえば「日本で西洋の“エンペラー”を“皇帝”と訳するのは、本当は誤訳なんです。江戸時代に、新井白石が確信犯的に“皇帝”と訳したんです。新井白石は漢学者でしたが、ちょっと国粹主義的な面があって、中国人だけが皇帝を名乗るのはおこがましいと考えて、ヨーロッパのエンペラーをわざと皇帝と訳したんです」と書いて、その後に皇と帝の字義解釈を続けている。また「切腹も、もともと中国の習慣でした。日本には切腹はなかったんです」と書き、ここでも中国での切腹の史実を紹介している。しかし関帝廟について、「日本でたとえれば、上杉謙信や楠木正成が金儲けの神様として祀られているような感じでしょうか。関羽の出身地である山西省からは、近代に多くの商売人が出ました。日本でいう近江商人のようなものです。その商売人たちが、故郷の偉大な有名人として関羽を祀ったので、商売の神様として広がったんです」と書いているが、この記述は誤りではないが、かなり舌足らずである。その他、本文中で書かれている記述も、深く追求したものではない。

加藤氏はこの本のあとがきで、「中国人の腹のうちを探ることは、それを鏡として、日本を振り返る作業でもある」と書いているが、この本の内容は中国人の「腹のうち」を探るには、不十分である。残念だが、この本を読んでも中国人の腹のうちはよくわからないだろう。

以上